第二問

次の文章は『落窪物語』の一節である。落窪の君は源中納言の娘で、高貴な実母とは死別し、継母にいじめられて育ったが、ひそかに道頼と結婚して引き取られて、幸福に暮らしている。少将だった道頼は今では中納言に昇進し、衛門督を兼任している。以下は、道頼が継母たちに報復する場面である。これを読んで、後の設問に答えよ。

かくて、「今年の賀茂の祭、いとをかしからむ」と言へば、衛門督の殿、「さうざうしきに、御達に物見せむ」とて、かねてより御車新しく調じ、人々の装束ども賜びて、「よろしうせよ」とのたまひて、いそぎて、その日になりて、一条の大路の打杭打たせ給へれば、「今は」と言へども、誰ばかりかは取らむと思して、のどかに出で給ふ。

御車五つばかり、大人二十人、二つは、童四人、下仕四人乗りたり。男君具し給へれば、御前、四位五位、いと多かり。弟の侍従なりしは今は少将、童におはせしは兵衛佐、「もろともに見む」と聞こえ給ひければ、皆おはしたりける車どもさへ添はりたれば、二十あまり引き続きて、皆、次第どもに立ちにけりと見おはするに、わが杭したる所の向かひに、古めかしき檳榔毛一つ、網代一つ立てり。

御車立つるに、「男車の交じらひも、疎き人にはあらで、親しう立て合はせて、見渡しの北南に立てよ」とのたまへば、「この向かひなる車、少し引き遣らせよ。御車立てさせむ」と言ふに、しふねがりて聞かぬに、「誰が車ぞ」と問はせ給ふに、「源中納言殿」と申せば、君、「中納言のにもあれ、大納言にてもあれ、かばかり多かる所に、いかでこの打杭ありと見ながらは立てつるぞ。少し引き遣らせよ」とのたまはすれば、雑色ども寄りて車に手をかくれば、車の人出で来て、「など、また真人たちのかうする。いたう逸る雑色かな。豪家だつるわが殿も、中納言におはしますや。一条の大路も皆領じ給ふべきか。強法す」と笑ふ。「西東、斎院もおぢて、避き道しておはすべかなるは」と、口悪しき男また言へば、「同じものと、殿を一つ口にな言ひそ」などいさかひて、え

とみに引き遣らねば、男君たちの御車ども、まだえ立てず。君、御前の人、左衛門の蔵人を召して、「かれ、行ひて、少し遠くなせ」とのたまへば、近く寄りて、ただ引きに引き遣らす。男ども少なくて、えふと引きとどめず。御前、三四人ありけれど、「益なし。この度、いさかひしつべかめり。ただ今の太政大臣の尻は蹴るとも、キ この殿の牛飼ひに手触れてむや」と言ひて、人の家の門に入りて立てり。目をはつかに見出して見る。

少し早う恐ろしきものに世に思はれ給へれど、実の御心は、いとなつかしう、のどかになむおはしける。

〔注〕○賀茂の祭――陰暦四月に行われる賀茂神社の祭。斎院の御禊がある。葵祭。
○打杭――打ち込んで立てる杭。ここでは、車を停める場所を確保するための杭。
○御前――車列の先払いをする供の人。
○侍従なりしは今は少将、童におはせしは兵衛佐――それぞれ昇進したということ。
○次第どもに――身分の順に整然と。
○檳榔毛一つ、網代一つ――いずれも牛車の種類。「檳榔毛」は上流貴族の常用、「網代」は上流貴族の略式用。
○見渡しの北南に――互いに見えるように、一条大路の北側と南側に。
○雑色――雑役をする従者。
○真人たち――あなたたち。
○豪家だつるわが殿――権門らしく振舞う、あなたたちのご主人。
○強法――横暴なこと。
○左衛門の蔵人――落窪の君の侍女阿漕の夫、帯刀。道頼と落窪の君の結婚に尽力した。
○人の家の門に入りて――牛車から離れて、よその家の門に入って。

設問

(一) 傍線部ア・イ・ウを現代語訳せよ。

(二) 「しふねがりて聞かぬに」(傍線部エ)とは誰がどうしたのか、説明せよ。

(三) 「一条の大路も皆領じ給ふべきか」(傍線部オ)とはどういうことか、主語を補って現代語訳せよ。

(四) 「殿を一つ口にな言ひそ」(傍線部カ)とはどういうことか、「一つ口」の内容を明らかにして説明せよ。

(五) 「この殿の牛飼ひに手触れてむや」(傍線部キ)とは誰をどのように評価したものか、説明せよ。